

## 【茨城】 圏内115の医療機関に日参し地域医療支援病院を目指す-小山記念病院の取り組み◆Vol.2

2021年4月28日 (水)配信 m3.com地域版

県内9つの2次医療圏中、人口10万対医師数が最少の鹿行（ろっこう）医療圏。その中核病院である医療法人社団善仁会小山記念病院は、急性期病院として多大なニーズを受け止める一方、その負担をバネにして新たな発展を遂げようとしている。連載第2回は、地域医療支援病院の認定を目指した地域連携活動や、市民のための「医療文化」づくりや「がん教育」について。（2020年1月22日インタビュー、計4回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)（近日公開）

▼第4回は[こちら](#)（近日公開）

### 市内35カ所、医療圏115カ所の診療所との連携が目標

茨城県の鹿行医療圏はもともと医療資源に乏しいが、ここ数年は圏内の大病院の閉院や機能低下の影響もあって一極集中の様相が強まっており、小山記念病院の患者数は年々増加している。2002年の新築移転時に想定した外来患者数は1日400人。現在はその倍の800人、多いときは1,000人超が訪れる。移転時になかったコミュニティバスが3路線、毎日28便が同院前に乗り入れるようになり、広い駐車場も連日満車となる。職員の車を停めるスペースが無く、職員用は敷地外に借りている。外来も、入院も、救急も、毎日あふれんばかりの状態である。

このままでは救急や重篤な患者の受け入れ困難が続き、鹿嶋市唯一の急性期病院として十分な役割を果たすことができない。

「ですから、うちの喫緊の課題は、地域医療支援病院の認定を受けることです。かかりつけ医との連携を増やして、外来を減らし、当院は急性期医療に特化する。そういう循環を作り出さなければ、この地域の医療は立ち行かなくなりです」（田中直見院長）

茨城県には現在、地域医療支援病院が17あるが、鹿行医療圏にはまだない。名実共に地域医療の中核病院として地域住民に認識してもらうためにも、ぜひとも必要な認定だ。院長から地域医療支援病院認定の命を受け、医療連携部長としてそのミッションに当たっているのが中山弘道副院長だ。緩和ケアと訪問診療をする傍ら、部下と手分けをして地域の診療所に日参している。鹿行医療圏には115カ所（うち鹿嶋市内が35カ所）の診療所があり、急性期病院としての機能を理解してもらうために、複数主治医制の説明をして、紹介や逆紹介の協力をお願いする。



中山弘道氏（副院長 兼 医療連携部部长 兼 緩和ケア科部長 兼 化学療法センター長）

「地域の先生方にも温度差はあります。地域の医療事情を分かってくさる先生は、こちらの目的も理解してくださり、紹介状のやりとりもスムーズに進みます。開業医の先生方とのやりとりは、些細なことでもかなりの時間を要します。ですから、医療連携部のスタッフには、少々負担がかかっているでしょう。しかし、そこは何とか踏ん張ってもらっています。この地域の医療資源の少なさを嘆いたところで何も始まりません。無いものは無いんだから、創

意工夫するしかない。まず手を付けるべきは、当院の外来を減らすことです。そして、うちが本当に診なきやいけない急性期の患者さんだけを診て、安定している患者さんは診療所で診ていただく。そうしていかないと、到底回っていきません。この地域が50年先、100年先も持続していくには、当院があがき続けるしかない。皆そう思って取り組んでくれていますね」（中山氏）

2017年からは、地元医師会の協力の元、隔月1回のペースで開業医向けの勉強会を開催している。また、地域がん診療病院として、がん医療の研修会や公開講座も年に3回以上行っている。連携を深めるきっかけとなることに加え、最先端の医療や、小山記念病院で可能な医療を知ってもらうことで、「この状態ならば、すぐに小山で診てもらわなければ」とか、「この症状は県立中央病院に送ったほうが良さそうだ」などと、患者と地域にとって正しい判断をすることにも役立てていただきたいと考えている。

### 市民の健康のために「医療文化」を創造する

医療機関同士の連携がとれるようになったとしても、最終的に医療機関を選ぶのは患者だ。市民が合理的に医療機関を選択できるようにならない限り、地域医療はうまく回っていかない。その意味での市民の医療に対する意識のレベルアップも小山記念病院は念頭に置いている。同院の顧問兼手術部部長の田上恵氏は、それを「医療文化の創造」ととらえている。

「当院で救命救急士の気管内挿管実習を行っていますが、ボランティアで患者さんにもご協力いただいています。実習を終えると患者さんに感謝状をお渡しするのですが、みなさんととても喜んでくださる。こういう機会が市民に地域医療を考えてもらう絶好のチャンスなんです。救急隊の人たちってこんなに頑張ってくれているんだとわかれば、救急車をタクシー代わりに使うという発想にはなりません。市民が限られた医療資源をどう使っていくかを考える、その基盤となるのが『医療文化』だと私は考えています」（田上氏）

田上氏は以前、東邦大学医療センター佐倉病院で病院長を務めていた。その地で行政や消防、警察、企業、市民と共に「医療文化」を発展させ、市民のNPO活動を活性化させた経験を持つ。その彼が今、鹿行地域においても医療文化を創造しようと奮闘している。何のためか？

「それは、もちろん市民のためです。医療文化を市民と共につくり、最終的にその恵みが市民へと還元されることが狙いです。その医療文化の中心になるのは病院です。鹿行の医療文化はこれから小山記念病院が中心となってつくりあげ、実った果実を市民へと行き渡らせていくのです」（田上氏）

### 市内全公立小中学校に「がん教育」を行う荣誉

顧問兼外科部長など小山記念病院の要職を多数兼務している呉屋朝幸氏も、この地域には、住民を中心とした「医療文化」の向上が必須と考えている。ひとつの理由は、がん死亡率の高さだ。

「6年前に赴任して驚いたのですが、ここは、がんで亡くなる方が非常に多いのです（Vol.1表参照）。医療や健康に関する知識が少ないために、病気がかなり進んだ状態で発見され、治療が困難なために死亡率が高まっているのだと思います。早くから医者に掛かっておけば、結果は全然違うでしょう。この地域の人たちには医療や健康の情報がもっと必要だと思いました」（呉屋氏）



呉屋朝幸氏（顧問 兼 外科部長 兼 医師支援部部長 兼 患者支援センター長 兼 消化器病センター長）

それ以来、呉屋氏は、小山記念病院のがん医療の責任者として、医療従事者向けの研修会や勉強会はもちろんのこと、「医療文化」の向上を目指して、一般市民向けの講演も数多く行ってきた。鹿嶋市主催の市民公開講座や同院が主催する「小山けんこうフォーラム」、また小中学校の「がん教育」のプログラムで先頭に立って講話をしてきた。この地域貢献活動が、このたび鹿嶋市に認められた。鹿嶋市と同院は2019年6月、学校健康教育の連携に関する協定を結んだ。これにより鹿嶋市内の全公立小中学校を対象とする「がん教育」「食育」「救命講習」を柱とした学校健康教育に関して、同院が全面的に協力することになった。同院にとって、また呉屋氏にとって、非常に光栄な仕事である。

「私が赴任するとき、ここは医療の貧困な地域だと聞いていました。調べてみたら、内実が分かりました。当時の茨城県内で、鹿行地域は人口にして9%を占め、所得税は8%を占め、事業税は14%を占めていました。つまり、この地域は県に十分に貢献しており、にもかかわらず医療資源が乏しいということは、市民は不当な扱いを受けていたのです。納めた税金に見合ったサービスを受けていない、非常にかわいそうな住民たちであるという思いが、この地域を良くしようと思って働いている今の私の原点です。私の赴任当時よりも、鹿行地域の医療事情は厳しさを増しています。隣の病院との競争に勝ちたい、といったモチベーションでは、もはやこの地域を支えることはできません。地域の医療機関同士が励まし合って、各々の医療資源をフル活用して地域に尽くしていかなければ、この地域の人たちは本当に不幸だと思いますね」（呉屋氏）

【取材・文・撮影＝荒尾真正】